

旧制中学校国語漢文科用教科書『国語』の特色(二)

武 藤 清 吾

(広島経済大学経済学部准教授)

(5) 第五学年―巻九と巻十―

1 巻九について

巻九・十は、巻八までとは違って上代から現代までの文学史区分に従った教材配列である。巻九では、上代から中世までの古典を学ぶことに主眼が置かれている。

上代から中世までの作品

巻九には、評論五、古文十八篇が収められている。古文は上代から中世までの作品である。和歌二篇、謡曲一篇が含まれている。

一課「読書に就いて」(小泉八雲)は、第五学年での「国語」学習の基本が示された評論である。上代から現代に至る傑作を受けとめる態度を考察している。八雲は、傑作の決定は数百年にわたる人類の意見の集積によるものであり、その通有性は永遠に古びないことであると述べている。ま

た、傑作とされるものには、心情の真実のさながらな披瀝があり、その選定は自己の衷にある光によると、傑作を選定する基準について述べている。

そうした傑作の観点を確認したうえで、各時代の文学史的特質を述べた総論を筆頭にして複数の個別作品を収めている。西尾らしい学習の便宜の図り方である。

上代の作品に入る前には、二課「大和国原」(武田祐吉)を配置して、三課「倭建命」(古事記)、四課「万葉集抄」を収録している。上代文学の総論、「大和国原」の梗概は次のとおりである。大和の国は日本文学発生の地である。大和三山地方が古代文化の中心地であった。平城京は七十余年間帝都として栄えた。万葉人は、ここを拠点に各地へと出かけた。その後平城京は衰退するが、文芸の力は残った。「大和国原」の収録は、大和の国の自然が日本文学発祥の源

であることを学習者に理解させることを目的としている。文末には、舒明天皇の「大和には 群山あれど とりよろふ 天の香具山 登り立ち 国見をすれば 国原は 煙立ち立つ 海原は 鷗立ち立つ うまし国ぞ あきつ島 大和の国は」(「万葉集」巻一の第二)を編者の西尾がつけている。「大和国原」の題意を理解させるための配慮であろう。

そして「古事記」の倭建命説話と「万葉集」の長歌、短歌、旋頭歌の歌体を示している。倭建命説話は、「熊曾健征討」、「東国平定」を収めている。「万葉集」は、柿本人麿、山部赤人、山上憶良、高市黒人、大伴旅人、大伴家持、元興寺の僧の各歌である。

平安の作品に入る前には、五課「平安京」(藤岡作太郎)を置き、六課「かぐや姫」(竹取物語)、七課「都鳥」(伊勢物語)、八課「宇多の松原」(紀貫之)、九課「古今集抄」、一〇課「須磨の秋」(紫式部)、一一課「春は曙」(清少納言)、一二課「道長の幼時」(大鏡)、一三課「法成寺の造営」(栄華物語)、一四課「源信僧都の母」(今昔物語)、一五課「新古今集抄」を収めている。九課「古今集抄」は、紀貫之、凡河内躬恒、紀友則、壬生忠岑、読人しらず、在原業平、僧正遍昭、藤原敏行、坂上是則の各歌、一五課「新古今集抄」は、藤原実定、藤原俊成、式子内親王、寂蓮法師、

藤原定家、藤原家隆、藤原秀能、藤原良経の各歌である。

「平安京」の梗概は以下のとおりである。平安京裏の貴族生活は安逸に馴れ、文学はただ都人の文学である。一時長岡に遷都するも山背で不便なため、山城の地へと移った。ここに平安京という。優雅な景色で山紫水明の語はよく京都の景色を表している。人事も自然に合わせてなされてきた。京都は実務の地ならずして風流の地である。

中世の作品に入る前に、一六課「中世の文学」(岡崎義恵)を配して、一七課「光頼卿の参内」(平治物語)、一八課「大原御幸」(平家物語)、一九課「新島守」(増鏡)、二〇課「日野の閑居」(鴨長明)、二一課「只今の一念」(吉田兼好)、二二課「隅田川(謡曲)」(宝生謡本)を収録している。

「中世の文学」は次のような内容である。文芸における中世的な真の建設者は僧侶である。武士は独立する力を持たずに僧侶にすがって力をのばしたにすぎない。その中世的なものの構造は原始的な力の内面化、心霊化の方向をとる。中世的なものの発生は、古典的なものの完成によって見出された内面的目標の追求による。宗教的・道徳的諸思潮の融合と統一によって完成された。

二三課「能面の表情」(野上豊一郎)が巻末に収められているのも興味深い。巻八の八課「鉢の木(謡曲)」と本巻の二二課「隅田川(謡曲)」の学習後に、能楽の表現論を学ば

せる配慮である。梗概は以下のとおりである。仮面の発明によって人間の超自然物になることを容易にした。能面の効果はその表情の均整が人間の肉の顔がいかなる調和を以てしても及ばないほどの高貴さを保持していることである。能面の無表情的表情こそがいずれにも変りうる表情である。このように、巻九は巻八までとは違った編集スタイルをとっている。収録された現代文に関しても、行的認識の考察や自然に対する見方、現実に関する斬新な視点による評論が並べられている。

行的認識

冒頭の「読書に就いて」は、読者論に通じる実践性を持っている。読書が単なる読み方を指すのではなく、読むことを通して傑作を作り出すという読者の存在の重要性を語っている。その具体例として、ゲーテをあげている。ゲーテの短編を子どもたちはお伽話のように喜んだが、それらの短編は青年にとっては厳粛な読物となり、中年の者はそれらの一字一句に非常に深い意味を読み、老人はそこに全世界の哲学と全人類の知恵とを見出したと説明している。そして、「要するに、読者が人間として勝れてゐるだけ、深く人生を知つてゐるだけ、作者の偉大さを発見するのである」と読書における読者の存在の意義を強調する。

『研究』には、本文の出自について、八雲の東京帝国大学での英文学専攻学生に対する講義で「彼が毎学期約束してゐた、各国に於ける文学制作者の実際上の経験の結果を示す講義の一つで、書物や典拠を離れて、文学的生活や著述の実際を知らしめやうとしたもの」であり、「日本の学生にもわかりやすくする為に、単純な話と構造とをもつて、極めてゆつくり講義した為に、日本の学生の或者は逐語的に筆記することが出来た」と記録されている。八雲の文学者としての魅力だけでなく、大学人としての姿勢にも西尾は共感していたことが窺われる。

国民精神の涵養、尊皇思想

『研究』では、三課「倭建命」(古事記)に「その根柢を皇室を中心とした国家的発展に置いた英雄伝説」と皇室の伝統を見ているが、「英雄的性質と情趣的性質とが交錯し融和して文芸的效果を示してゐる」とも述べて、採録の主眼としては文学史的理解がめざされていたと考えられる。

自然

各時代の概括である「大和国原」、「平安京」、「中世の文学」は、どの時代にも自然美や自然と人事の交錯など、自然が文芸の誕生の源泉として色濃く影響してきた事実を述べている。「大和の国の自然」から発生した古代文学、「優雅な景色で山紫水明」の平安京から生まれた中古文学、「原

始的な力の内面化・心霊化の方向」をとった中世文学という理解がめざされている。

芸術

「能面の表情」(野上豊二郎)は、無表情である能面が実は表情を作るといふ指摘をしている。無表情ゆえに「喜悅の表情にも、悲哀の表情にも、快活の表情にも、いづれにも変り得る表情である」といふ身体的感情的可能性を学ぶことにより、能楽の実践的な意義、芸術の持つ魅力に触れることができるようになるというのである。

2 卷十について

卷十は、卷九に続き、近世から現代までの作品を取りあげながら、中等学校の学習の総仕上げとして創作に通じる道の意義について学ばせている。

近世から現代までの作品

卷十には、小説三、随筆二、評論七、近古文八篇の二十篇が収められている。古文は、近世の作品が収められ、現代では明治期の作品が収められている。

一課は卷九と同様八雲の評論である。卷九が読書という鑑賞を問題とした評論であったのに対して、卷十は創作を問題にする「制作の方法」(小泉八雲)から始めている。

近世文学については、二課「近世の文学」(藤村作)が、

卷九の二課「大和国原」、五課「平安京」、一六課「中世の文学」に続いて、その時代の文芸思潮の解説の役割をしている。

藤村作は近世という「固定」した身分社会での文芸の発生について次のように述べている。人生に義理と人情との葛藤の生ずるのは、固定した道徳・習慣という堤防が自由な流れを阻止するからである。近世文学は、こうした義理と人情の衝突に着想を得ているが、その態度は事件の人物に相應の同情を持つというものである。人情の清さ、美しさ、切なさを認めながら、しかも義理の精神を一層大きく高く尊いものとしている。つまり近世の作者が最も強調したものは義理の精神であり、時代の理想であった義理に殉ずる精神である。

そして、三課「馬追三吉」(近松門左衛門)、四課「大晦日」(井原西鶴)で元禄期の二大作家の作品を配している。また、元禄期の俳人の五課「幻住庵の記」(松尾芭蕉)と天明期の代表的俳文集「鶉衣」の六課「俳文二篇、奈良国賛、蓼花巷記」(横井也有)、化成品の俳文の七課「みとり日記」(小林一茶)を並べている。さらに、国学者の随筆である八課「物学び」(本居宣長)と国学者の短編小説である九課「月の前」(上田秋成)を並べ、近世の最後に文化文政期の江戸文芸の代表作家の作品を一〇課「芳流閣」(滝沢馬琴)に収

めている。

明治期に関しては、明治二、三〇年代の自然主義以前の文学を一一課「五重塔」(幸田露伴)、一二課「塩原」(尾崎紅葉)で取り上げている。そして、浪漫主義的思潮の作家の随筆である一三課「山庵雜記」(北村透谷)、自然主義文学理論を述べる一四課「自然主義の文学」(島村抱月)、反自然主義作家である漱石の文学を論じた一五課「肯定観の文学」(岩城準太郎)、その漱石の小品である一六課「秋露」(夏月漱石、漱石に並ぶ明治文学の巨匠の小説である一七課「高瀬舟」(森鷗外)、宗教の哲学的考察としての一八課「愚禿親鸞」(西田幾多郎)、美学的な観点から国文学を論じた一九課「国文学の精神」(久松潜一)を配している。

一四課「自然主義の文学」(島村抱月)は、その名の由来を説いている。文芸には、快樂と實際的意義が必要であり、自然主義文芸の場合も真と美がこれに該当する。真を發揮せずにはいられない要求がこの文芸となったのである。また美は人間一切の現象を包容し得る文芸の終極点の名である。自然主義という呼称は、文明対自然の關係を描く、物的現実を揭示するところからきている。以上が本稿の概略である。

また一五課「肯定観の文学」(岩城準太郎)は、自然主義の人生の否定観に対して漱石及びその一派の肯定観の文学

があったことを紹介している。以下梗概を記す。漱石の作に見える人生も苦悶の人生であるが、一度この境界を脱却してこれを客観視する心境を作り、さらにこの世に移り住んで超越して人生を味わおうとする。悠々とした余裕がある。何物にも拘泥しない広さがある。これは俳諧的である。人間の生死や苦悩を月花と同じように眺めるのである。この文学は、自然主義文学の行き詰まった頃から青年読者の賛同を得て文壇の大樹となった。

近代文学の二大潮流をこの二編によって示し、自然主義文学が漱石らの文学に席を譲ることになる事情を学ばせることが期待されている。実際に小説として取り上げられたのは、一一課「五重塔」(幸田露伴)、一二課「塩原」(尾崎紅葉)、一七課「高瀬舟」(森鷗外)の三篇である。この選択基準には西尾の行的認識論が反映している。折からの烈風強雨で揺れ動いている落成直後の五重塔と命をとにもする覚悟をする「五重塔」の十兵衛の生き方、那須野原の広々とした光景、絵を見るような清穩の風景にあり、すべてを忘却する「塩原」の主人公の心境、弟殺しの罪で遠島に高瀬舟で流される「高瀬舟」の喜助の生き方に人生の深淵に立ち会う人々の哀なるものへの共感を讀んでいるのである。

行的認識

巻十の一課も巻九と同様に「制作の方法」という八雲の

文芸実践論から始められている。

八雲は、文学は情緒表現の芸術であると定義して、制作の意義を次のように述べている。ある事物が与える特別な感情・情緒が芸術家の求めるものである。感情を表現するとは感情を再生することである。そのためには、感情の曲がってきた事実、原因を詳しく書き留めることである。経験の覚書を作ることである。次に、この覚書を発展させて、それに自然の順序を与えて、正しい方法で文章を構成することである。四度目五度目と書き直しているうちに多くの変化が生じてくる。この時点でこれまで書いたものの多くは不必要であることに気づく。こうして真に書くこととするものが見えてくる。古典と呼ばれるものは必ずや完全な仕上げをしているものである。理論的な制作論というよりも体験的制作実践論である。「読書に就いて」と「制作の方法」を対置することで、文学における二大側面である鑑賞と創作という実践に自覚的になることを求めているのである。

一三課「山庵雑記」（北村透谷）と一八課「愚禿親鸞」（西田幾多郎）は、信仰の道と行的認識の関わりを問題にしている評論である。

「山庵雑記」の梗概は以下のとおりである。まことの樂は無心に生じる。感應は自分を主として他を主とするものではない。運命に黙従して神意に一任してはじめて真悟の

域に達する。苦海塵境を別天地に逍遙するのが詩人の至快であり、清涼の氣を運び入れるのが天職である。他人の非を測ることで自戒される。悔改の生涯は即ち信仰の生涯である。

また、「愚禿親鸞」は、親鸞の生き方から信仰の意義を考察する。親鸞が称した愚禿は、上人の人となりを示し、真宗の教義を標榜している。愚禿は愚禿の所以を味わい得た者のみがこれを知ることができる。一切の宗教はこの愚禿の二字を味わうことにはかならない。以上が梗概である。

信仰の問題を狭義に扱わず、広く人生と人間を信じることの意味の考察に求めていることに共通点がある。西尾がこの二編を選んだのも、これらが狭い宗教論ではなく、信じるという行の本質に迫ろうという視点で書かれたものであることによっている。

卷十の巻末は西尾実自らの書き下ろしである二〇課「生涯稽古」である。これを全十巻の巻末に配して『国語』の体系を締めくくっている。「生涯稽古」は世阿弥の「生涯稽古」を紹介した文章であり、西尾の教養論の中心に位置づいている。世阿弥の能楽論の基底である「稽古論」、花伝書の「非道行ずべからず」の一句を示して、一道集中の精神に学ぶことの意義を説いている。

国民精神の涵養、尊皇思想

明治期の評論もすべて文学史で構成することで、皇国史観の入る余地を少なくしたと思われる。

文学史別教材配列

今日でも、巻九、巻十のように文学史的配列で作品を収めている「国語」科教科書もあるが、時代ごとの文芸思潮を扱った評論を枕にしてここまで徹底した作品配列をした教科書はない。その理由として「国語」の配当時間が少なくなってきたことと国語総合や古典など科目の細分化がなされたことをあげることができる。しかし、より本質的には「国語」科教育の性格の変化によっている。自然と人事の問題を統一的に扱うことの魅力を「国語」科教育が喪失したことがもつと大きな原因であると考えられる。その具体的な例として、紀行文と叙景文の学習の意義がしだいに薄れ、その教材化が減少していったことをあげることができる。

三 各巻の特徴と全体の特徴

1 全体的な特徴―主題單元型の編集―

『研究』では『国語』所収教材の学年配当について、次のように述べている。¹⁾

第一学年から第三学年に至る三箇年に於ては、既に選択されてゐる教材を生徒心意の発達の程度と季節との關係に適應して排列し、第四学年に於ては日本文化の全面を概観せしむべく、第五学年に於ては国文学の史的展開の跡を辿らしむべく、それ／＼排列を試みみた。

こうした編集姿勢をふまえ、収録された教材の内容面から各学年、各巻の特徴をまとめると次のようになる。

第一学年 「国語」とは何か

巻一 行的認識の具体的な姿、家族、追憶、童心、

尊皇思想、自然

巻二 行的認識の具体的な姿、家族、追憶、童心、

帝国日本、自然

第二学年 人に学び、技に学ぶ

巻三 行的認識を体現した人物像、自然、家族、故郷、歴史、学問、文化

郷、歴史、学問、文化

巻四 行的認識を体現した人物像、自然、学問、芸術、スポーツ文化、生活・労働

術、スポーツ文化、生活・労働

第三学年 道の意義と国民的自覚、学芸と自然紀行

巻五 道の意義と具体、尊皇思想と国民的自覚の発

揚、自然紀行、古文

卷六 学問、芸術、評伝

第四学年 学芸と道

卷七 芸術と文章

卷八 学問と歴史、精神、都市、芭蕉、紀行文

第五学年 小泉八雲の読書論と制作（創作）論

卷九 文学史（古代から中世）と古文、読書論、能

楽

卷十 文学史（近世から現代）と近古文、文学論、

創作論

第一学年から三学年までは、西尾が『国語国文の教育』で主張した行的認識に培う「国語」教育の具体化としての学びが求められている。第四学年は、日本文化の中心としての学芸と道を古今東西の文化論で編集している。第五学年は、全体としては国文学の史的展開であるが、巻九の冒頭が小泉八雲の読書論で始まり巻十の最後が西尾本人の「生涯稽古」で終わっていることを考えると、創作と読書の実践論であることが見えてくる。

次に各巻の文種別収録状況を見ておきたい（表1参照）。小説・童話は各巻に平均して収録され、各学年で学ぶことが求められている。戯曲も各学年で一編ずつ学ぶことに

なっている。詩・短歌・俳句の韻文も一から四学年まで平均して学ぶことになる。随筆・小品は一、二学年での教材が多く、伝記・評伝は三、四学年に集中している。説明文と報告文は低学年で学び、評論と古文は高学年になるにつれて漸増していき、特に四、五学年で多く学ぶ構造である。書簡文はわずか一篇で、他の読本と比べきわめて少ない。紀行文については各学年で三、四篇の収録である。あとで見ると、古文の中に芭蕉の紀行文などがあり、現代文と古文の両方で紀行文を学ばせようとしている。この教材配列の仕方に『国語』の特徴がある。その影響は今日の教科書にまで続いている。しかし、今日の教科書との相違点は、紀行文と叙景文の扱い方である。紀行文については先に見たとおりであるが、叙景文についても『国語』での採録は多い。随筆や小品の多くが叙景文であり、古文にもいくつか見られる。採録数では、全体の三割を占めている。

次に、収録作家、評論家から見た『国語』の特色について考えたい（表2参照）。

まず回数が多い藤村、漱石、鷗外、白秋、蘇峰は、近代の代表的な作家、詩人、評論家である。赤彦についての文章が多く採られていることについては、代表的な歌人であることに加えて、西尾と同じ信州出身文学者として赤彦を高く評価していたことと関わりがある。西尾自身も赤彦敬

表1 各巻の文種別収録数

巻	一	二	三	四	五	六	七	八	九	十	計
小説	5	3	2	2	2	1	2	1		3	21
随筆	7	7	5	10	5	1	4	1		2	42
紀行文	2	1	3	1	2	1		2			12
伝記	2	1		2	1	4	1	3			15
戯曲		1		1		1		1			4
説明文	3	2	3		2			1			11
報告文	1	1	2								4
書簡文			1								1
詩	1	2	1		1	2	1				8
短歌	1	1	1	1			1				5
俳句				1							1
評論		1		1	2	4	5	5	5	7	29
古文	3	2	3	5	8	6	8	6	18	8	67
計	25	22	21	24	23	20	22	20	23	20	220

*巻一、二には、課目として掲出されていない漢文教材がそれぞれ三、二篇ずつある。

慕の文章を多く書いている。また、芥川龍之介編『近代日本文芸読本』との共通採録作家も多く、採録にあたつてこの読本から受けた影響も大きかったと想像される。

虚子や子規が比較的多いのは、彼らが紀行文作家でもあったことによる。これは紀行文の項で見えるように、『国語』の特徴が西尾の行的認識論に支えられた実践的文章論であ

ることからきている。さらに芭蕉の登場機会も多く、芭蕉と紀行文、子規など紀行文、八雲と紀行文、藤村と随筆、冬彦と随筆という構造になっている。

八雲が多いのも彼の何がとられたかを見ると分かる。巻一「曙の富士」は小説、巻四「神国の首都」、巻五「極東に於ける第一日」は随筆である。来日したときの印象を語る紀行文である。

また、巻九「読書に就いて」と巻十一「制作の方法」は、読書と創作という文章の基本に関する評論である。実践的な紀行と文章のあり方を示すために八雲の文章が入れられている。

この点は、古文も共通している。表3「古典作品の配置」でも、近世の評

論や随筆が多用されているのが分かる。橘南谿の随筆、新井白石の評伝、本居宣長の国学に関する評論が目につく。

また、古文では、軍記物語の収録が多い。特に『平家物語』から多く採用されている。これは行的認識にもとづく道思想を『平家物語』に見ているからであろう。

吉田兼好、鴨長明は、西尾の中世的なるものの議論が背

景にある。中古の「幽玄」「あはれ」が、中世になって「わび」「さび」として昇華していく。その中世思想の完成を芭蕉に見るといふ考察である。

中世後期の戯曲、歌謡、謡曲も、道の実践論の具体化として読んでいる。

表2 収録作家・評論家収録回数

6回	島崎藤村 夏目漱石 島木赤彦	2回	安倍能成 伊藤左千夫 内村鑑三	1回	阿部次郎 飯田蛇笏 岩城準太郎	小泉信三 櫻井忠温 澤田謙	浜口雄幸 久松潜一 藤原咲平
5回	岡本綺堂 岡倉覚三		石川啄木 浦松佐美太郎 岡田武松	西郷隆盛 佐藤功一 島村抱月	藤村作 ファール 前田夕暮	紀貫之「宇多の松原」⑨ 「古今集抄」⑨	伊勢物語「都鳥」⑨ 竹取物語「かぐや姫」⑨
4回	小泉八雲 北原白秋 徳富蘇峰 森鷗外		荻原井泉水 北村透谷 国木田独步 幸田露伴	杉村楚人冠 千家元磨 相馬御風 田部重治	三木露風 村井弦斎 武者小路実篤 溝口白羊	大鏡「道長の幼時」⑨ 栄華物語「法成寺の造営」⑨ 今昔物語「源信僧都の母」⑨	吉田兼好「道を知れる者」⑤ 太平記「熊野落」⑤ 太平記「正行の参内」⑤
3回	芥川龍之介 五十嵐力 高浜虚子 長塚節 西尾実 芳賀矢一 正岡子規		志賀直哉 徳富蘆花 中勘助 野口英世 藤岡作太郎 松本亦太郎 吉江喬松 和辻哲郎 若山牧水	尾崎紅葉 河井醉茗 勝海舟 蒲原有明 金田一京助 菊池寛 木下利玄 厨川白村 窪田空穂	茅野蕭々 綱島梁川 坪内逍遙 富田高慶 土井晩翠 中村吉蔵 西田幾多郎 野上豊一郎 長谷川「蕪亭」	山口青邨 八代幸雄 横山桐郎 吉田絃二郎	鎌倉時代 吉田拾遺「熊王の発心」⑤ 平家物語「故郷の花」⑤ 平家物語「小枝の笛」⑤ 平家物語「扇の的」⑤

表3 古典作品の配置

*低学年から順に並べてある。各巻の配列順のままである。

○数字は、巻数を示す。

古文

奈良時代

古事記「倭建命」⑨

「万葉集抄」⑨

平安時代

伊勢物語「都鳥」⑨

紀貫之「宇多の松原」⑨

「古今集抄」⑨

紫式部「須磨の秋」⑨

清少納言「春は曙」⑨

大鏡「道長の幼時」⑨

栄華物語「法成寺の造営」⑨

今昔物語「源信僧都の母」⑨

鎌倉時代

吉田兼好「道を知れる者」⑤

太平記「熊野落」⑤

太平記「正行の参内」⑤

吉野拾遺「熊王の発心」⑤

平家物語「故郷の花」⑤

平家物語「小枝の笛」⑤

平家物語「扇の的」⑤

<p>古今著聞集「芸能逸話」⑥</p> <p>保元物語「鎮西八郎為朝」⑥</p> <p>続狂言記「狐塚（狂言）」⑥</p> <p>「水の音（和歌）」⑦（西行）（源実朝）</p> <p>平家物語「平重盛」⑦</p> <p>平家物語「福原落」⑦</p> <p>鴨長明「ゆく川の流」⑦</p> <p>吉田兼好「法師の話」⑦</p> <p>平家物語「大原御幸」⑨</p> <p>増鏡「新島守」⑨</p> <p>鴨長明「日野の閑居」⑨</p> <p>吉田兼好「只今の一念」⑨</p> <p>「新古今集抄」⑨</p> <p>平治物語「光頼卿の参内」⑨</p> <p>室町時代</p> <p>観世謡本「鉢の木（戯曲）」⑧</p> <p>北畠親房「人臣の道」⑧</p> <p>梁塵秘抄「舞へ舞へ蝸牛（歌謡）」⑧</p> <p>宝生謡本「隅田川（謡曲）」⑨</p> <p>江戸時代</p> <p>柳澤淇園「かんにん」①</p> <p>橘南谿「藤樹先生」①</p> <p>新井白石「父の物語」②</p> <p>橘南谿「蜃気楼」②</p> <p>柳澤淇園「親心」②</p>	<p>橘南谿「霧島山」③</p> <p>新井白石「伊達政宗」③</p> <p>湯浅常山「天徳寺覚伯」③</p> <p>新井白石「板倉父子 板倉勝重 板倉重宗」④</p> <p>貝原益軒「惜陰」④</p> <p>三浦梅園「誠」④</p> <p>杉田玄白「創始者の苦心」④</p> <p>室鳩巢「青木新兵衛」④</p> <p>「国上山（和歌）」（良寛）（橘曙覧）（平賀源内）⑤</p> <p>花屋日記「芭蕉の臨終」⑥</p> <p>与謝蕪村「雑煮（俳句）」⑥</p> <p>沢庵「不動智」⑥</p> <p>本居宣長「源氏物語論」⑦</p> <p>松平定信「学問」⑦</p> <p>「雅文四篇」⑦</p> <p>隅田川の雨（橘千蔭）</p> <p>曇る夜の月（村田春海）</p> <p>砧を聞く（清水浜臣）</p> <p>夜学（中島広足）</p> <p>良寛「月の兎」⑦</p> <p>松尾芭蕉「奥の細道」⑧</p> <p>松尾芭蕉「陽炎（俳句）」⑧</p> <p>二宮翁夜話「人道」⑧</p> <p>滝沢馬琴「芳流閣」⑩</p> <p>近松門左衛門「馬追三吉」⑩</p>
---	---

<p>井原西鶴「大晦日」^⑩ 松尾芭蕉「幻住庵の記」^⑩ 横井也有「俳文二篇 奈良国賛 蓼花巷記」^⑩ 小林一茶「みとり日記」^⑩ 本居宣長「物学び」^⑩ 上田秋成「月の前」^⑩</p>	<p>漢文</p> <p>「金言」^① 「人」^① 「実語教」^① 原善「白石朋ヲ薦ム」^② 「実祚無窮」^②</p>
--	---

2 行的認識

編者である西尾実の書き下ろし教材が三篇あることについて、また巻五の「ツエツペリン伯号を迎へて」を「日本の魔法鏡」に差し替えた経緯は拙稿「西尾実の教養論と教材論」で触れた。

行的認識の文章は、各巻に多く採用されている。『国語』は、人に学び技に学ぶ指南書であるように印象されるほどである。『国語』に魅力を感じるのには、道を究める意義や道の思想、その具体的な姿に魅かれるからである。

全体の特徴でも見たように、本書を日本型教養の書物として定位している大きな要因はこの編集姿勢にある。それは、阿部次郎、安倍能成、綱島梁川、西田幾多郎、和辻哲郎が入っていることをさすだけではない。行的認識という方法体系を骨格にした実践的な編集が貫かれているからである。日本型教養は瞑想的な印象を持ちやすいが、中心に

ある思想は認識的実践論である。『国語』の意義は、認識的実践論を核に据えたことである。また、西尾が『国語国文の教育』で語っているように、創作は最後の決定的なところに表なるものという気づきが必要になる。これが神秘的色彩を生み出す。これも西尾が『国語』で学ばせたかったことである。その意味で、今日の「国語」教育も、近世思想の再評価も含め『国語』からの再検証が求められている。

3 尊皇思想と国民精神の涵養

一九三、四〇年代に使われた教科書としては、尊皇思想と国民精神の涵養に関する教材はきわめて少ない。まず各巻の関連教材を見ておきたい。

巻一 二課「桜」（芳賀矢一）、三課「曙の富士」（小泉八雲）、四課「明治天皇御製」、一一課「八丈島行幸」（藤

原咲平)、二〇課「愛馬」(櫻井忠温)、二五課「国旗」(日の丸由来記)

卷二 一課「日本」(山村暮鳥)、二課「明治神宮」(溝口白羊)、一七課「両雄の会見」(小笠原長生)、二二課「国史に還れ」(徳富蘇峰)『日本書紀』『実祚無窮』(漢文教材)

* 『研究』では、「卷一では、国土愛・国家愛の象徴として二「桜」・三「曙の富士」・二五「国原」を掲げて来た。卷二では、一「日本」・二二「国史に還れ」等に於て、直接国土愛・国家愛等を喚起し、覚醒させようとしてゐる」と述べている。

卷三 九課「日本海の大戦」

卷四 三課「庭前の榎の樹」(浜口雄幸)

卷五 一三課「乃木大将の殉死」(徳富蘇峰)

* 六課「熊野落」(太平記)、七課「正行の参内」(太平記)、八課「熊王の発心」(吉野拾遺)、一四課「故郷の花」(平家物語)、一五課「小枝の笛」(平家物語)、一六課「扇の的」(平家物語)と、軍記物語を連続して収めている。吉野拾遺、太平記、平家物語から収録されている。どれも三から六頁の短い文章である。

『研究』では、「吉野朝の文学は、その時代が非常

時であつただけに、平常には見られないやうな尊

皇・愛国の至情が迸り流れてゐて、後代の国民がこれを詠んで感奮、興起せざるを得ないものが少なくない。その皇居の地であつた吉野山を序篇として、吉野朝文学から三篇を掲出し、当時の事件と人情とに触れさせ、国民的自覚を促さうとする」と採録の趣旨を述べている。ここにも明らかのように、「太平記」を歴史的文化的文脈ではなく、その当時の政治的文脈に位置づけてしまっていると言わねばならない。

卷六 一〇課「愛国者福沢諭吉」(小泉信三)

卷七 なし

卷八 一一課「人臣の道」(北畠親房)

* 西尾は、本文の解題で「国体の尊厳と皇位継承の正統とを明らかにし、以て大義名分を強調し」、「近世の史学界・思想界に甚深の影響を及し、明治維新の原動力をなした」と述べている。文末には、「大日本は神国なり」とある。

卷九 三課「倭建命」(古事記)

* 本課の主眼は文学史的理解である。

卷十 なし

* 明治期の評論もすべて文学史で構成することで、皇国史観の入る余地を少なくしたと思われる。

このように、尊皇思想と国民精神の涵養を主題とする現代文教材は一五課と少ない。古文教材にその傾向を認めるとしても、二〇課程度である。しかも、それらは巻一・二に集中している。この傾向は、『国語』改訂版でも変わらない。松崎正治・浜本純逸「昭和戦前期における西尾実の学習指導観―岩波『国語』とその教授用参考書の分析を通して―」²³では、『国語』改訂版について収録本文二二五課のうち、「皇国民育成教材」は一〇課であると指摘している。

こうした状況は、西尾が尊皇思想と国民精神の涵養を主題とした教材を直接に手渡すというよりも、行的認識と関連付けて、帝國的なイメージを消そうとしていると考えてよい。しかし、「二『国語』考察の意義」で述べたように、その意図は、一部の巻に集中させ教材数を減らす点では成功したが、行的認識と関連づけたことで自閉した構造が作られたという弱点を持ったのである。

また、次のような証言もある。中学一年から『国語』で学んだ諸井耕二は、一学年の巻一・二には忘れがたい作品が多くあったと述懐している。小説では、芥川龍之介「蜘蛛の糸」「トロッコ」、志賀直哉「屋根」(『暗夜行路』)、二葉亭四迷「ポチ」(『平凡』)、そのほか島木赤彦「かるさんと米」、武者小路実篤「宮本武蔵」もあげている。また、「初版」では、気象学者の岡田武松「空の色」のあとに加えら

れていた「五雑組」の「朝霞市ヲ出デズ、暮霞千里ニ走ル」が、「改訂版」では推敲がされて、「支那では、昔は朝焼を朝霞といひ夕焼を暮霞といった。五雑組に「朝霞市を出でず、暮霞千里を走る」と「空の色」本文に組み込まれていることを指摘している。「改訂版」で学習した諸井は、「千里を走る」で記憶した事情が飲み込めたことを説明している。そのうえで戦時下の厳しい言論統制のもとでも、『国語』が果たした役割の大きさに触れて次のように言う。

このように見えてくると、私にとっては、主として小説や随筆など文芸的なものが心の底にとどまっていた、国家主義的な内容の文章は全く記憶にないことになる。これは私自身の感受性に係わることでなく、天皇や軍人に関するような話は、小学校以来事あるごとに聞かされていたことであって、新鮮味などまるでなかったからに違いない。それに比べて、この教科書に選ばれていた質の高い教材は、私の知らない世界へと目を開かせてくれたので、未だに記憶に鮮明であるのだと思う。／こう考えると、しっかりとした指導者の下、一本筋の通った教科書で、5年間きちんと学んだならば、中学校の段階でかなり高度の知識や教養を身に付けることが出来ていただろう、と悔やまれる。

今、この「岩波国語」十巻を手にしての思いは、そのような学習を可能とする平和な日々の尊さという一点にしぼられてくる。

『国語』を直接学んだ学習者の証言として重いものがある。

4 紀行文と叙景文―自然と歴史への着眼― ア 紀行文と叙景文への注目

『国語』に収録された全二二〇篇の作品のうち一二篇が紀行文である。随筆にも紀行文的な色彩の濃いものが四篇ある。現代文の紀行文は以下のとおりである。

巻一 一五課「苺と芙蕖」(正岡子規)、一六課「上高地」(田部重治)

巻二 四課「小春の岡」(長塚節)

巻三 三課「島四国」(荻原井泉水)、七課「千本松原」(伊藤左千夫)、一五課「金華山」(長塚節)

巻四 一課「初旅」(島崎藤村)

巻五 五課「吉野の桜」(吉田絃二郎)、一八課「仏法僧」(高浜虚子)

巻六 一六課「檜原峠越」(大島亮吉)

巻八 二課「巴里通信」(島崎藤村)、三課「中宮寺の観

音(和辻哲郎)

これ以外にも、巻四には、武蔵野の自然を描写した一二課「遠望」(吉江喬松)、筆者の郷里の冬の生活を描いた一七課「湖畔の冬」(島木赤彦)、ピッツ・ベルリーナからスキーで下ってきた体験を描く一八課「銀線を描く」(浦松佐美太郎)も紀行文に近い表現方法の随筆である。巻五の一七課「水郷」(北原白秋)も郷里柳川の四季と自然を紀行文らしい方法で描いている。

さらに興味深いのは、小泉八雲の小説と随筆である。巻一の三課「曙の富士」、巻四の二四課「神国の首都」、巻五の三課「極東に於ける第一日」の三篇は、ラフカディオ・ハーン(小泉八雲)が、初来日の際の印象を記したものである。また、古文では二篇の紀行文が収められている。巻三の一九課「霧島山」(橋南谿)と巻八の五課「奥の細道」(松尾芭蕉)である。

随筆四二篇、小説二一篇、評論二九篇と比較して、紀行文の存在が大きい。他の「国語」読本と区別する特徴としてあげておきたい。

イ 『国語』の芭蕉の扱い

そのなかで芭蕉に関するものは、巻八の六課「陽炎(俳句)」(松尾芭蕉)、巻十の五課「幻住庵の記」(松尾芭蕉)がある。

このほか巻一の「苺と茱萸」（正岡子規）も芭蕉の「奥の細道」の跡を辿った紀行の一部である。子規には『はて知らずの記』が著名であるが、「苺と茱萸」を収録している。おそらく初学者への配慮であろう。巻六の一課「秋」（綱島梁川）の「あれこれをあつめて霞む春の朧」も芭蕉の句である。

六課「芭蕉の臨終」（花屋日記）は、臨終における芭蕉の心境を語っている。『研究』の「採録の趣旨」には、「俳諧文学に生命を入れ、日本文学を象徴の深さにおいて発展させ、同時に人間としての完成を体現した芭蕉の臨終記」とある。

尚、西尾は、幸田露伴、沼波瓊音、安倍能成、阿部次郎と芭蕉研究会を起し、その研究の集積を刊行もしている。

ウ 認識的実践論と芭蕉

西尾は「国学の实践性」で「実践の意義」について、「われわれの生活や文化における現実の尊重」、「認識の方法としての体験の重視」を示している。芭蕉が幽玄から切り離されて生み出された「わび」「さび」を彼らの現実世界に置き、文芸実践としていったことが西尾の目に留まっている。和辻哲郎『風土』の自然と文化への西尾の関心も同様である。『国語』におけるゲーテと芭蕉の配置についてもおそらく芥川龍之介『芭蕉雑記』の影響がある。

エ 自然への着目―音と色―

『国語』が季節感を尊重した編集であることはすでに述べた。『研究』で示されているように各学年の上巻は、春から夏にかけての題材、下巻は秋から初春にかけての題材を中心に選んでいる。

巻三の二課「潮の音」（島崎藤村）の詩の自然の音、巻四の二四課「神国の首都」（小泉八雲）の生活や自然の中にある音や色、巻五の三課「極東に於ける第一日」（小泉八雲）の紺色、巻七の四課「法隆寺」（高浜虚子）の法隆寺の色と音に注目した随筆が並ぶのも興味深い。これも教養のあり方に対して示唆的な編集である。

5 幻想的な小説

『国語』に収録された小説は表4のようにわずか二十一篇である。しかし、このわずかな収録数が『国語』の特徴をよく表している。小説や童話、戯曲の収録数を厳選し、魅力的な作品を各学年に配置した。そのなかに幻想的な作品が多く含まれている。全体として幻想的な作品が目立っている。

どの小説も、現代まで読み継がれてきた作品ばかりである。西尾の鑑賞眼の確かさが示されている。収録作家も、幸田露伴、尾崎紅葉、二葉亭四迷、国木田独步、夏目漱石、

森鷗外、村井弦斎、中勘助、志賀直哉、高浜虚子、芥川龍之介の十一名である。また、それぞれの作品も各作家の代表作またはその抄録であり、同時代にも高い評価を得たものを並べている。村井弦斎の「吹雪」は『近江聖人』を抄録している。『近江聖人』は、今日ではあまり読まれなくなった少年文学であるが、『少年文学』発表当時は出色の少年文学として注目された。

幻想的な作品が多数を占めたのは、自然主義文学を取ろ

表4 収録小説

表4 収録小説	
<p>卷一</p> <p>小泉八雲「曙の富士」『心』</p> <p>夏目漱石「峠の茶屋」『草枕』</p> <p>中勘助「夕がたの遊」『銀の匙』</p> <p>芥川龍之介「蜘蛛の糸」</p> <p>志賀直哉「屋根」『暗夜行路』</p> <p>卷二</p> <p>芥川龍之介「トロッコ」</p> <p>村井弦斎「吹雪」『近江聖人』</p> <p>長谷川二葉亭「犬ころ」『平凡』</p> <p>卷三</p> <p>中勘助「山の手の家」『銀の匙』</p> <p>志賀直哉「焚火」</p> <p>卷四</p> <p>高浜虚子「柿二つ」</p> <p>森鷗外「厨子王」</p>	<p>卷五</p> <p>国木田独步「非凡なる凡人」</p> <p>夏目漱石「仁王」『夢十夜』</p> <p>卷六</p> <p>森鷗外「天籠」</p> <p>卷七</p> <p>芥川龍之介「戯作三昧」</p> <p>森鷗外「寒山拾得」</p> <p>卷八</p> <p>夏目漱石「東洋の詩境」『草枕』</p> <p>卷九</p> <p>なし</p> <p>卷十</p> <p>幸田露伴「五重塔」『五重塔』</p> <p>尾崎紅葉「塩原」『金色夜叉』</p> <p>森鷗外「高瀬舟」</p>

うとしなかったことの反映であろうか、生命主義的潮流との関連も見えておく必要がある。

6 学習指導への細やかな配慮

最後に、学習者への配慮と同時に、指導者の学習指導を豊かにするための細やかな心配りが実践されていたことを見ておきたい。

『国語』の「編集室と教室との連絡機関」という位置づけで、現場で学習指導を進めるための補助資料として活用できるように『国語 特報』が非売品として二十八号まで刊行された。その内容について、紙幅の関係で第七号までの総目次(細目)を掲げてみる。^①

第一号(昭和一〇年一月二〇日、八頁)

所信を明かにす―国語教科書出版に際して― 岩波茂雄

国語教材における文芸性と国家性 西尾実

国語教授に関する研究の組織

編集室より

第二号(昭和一〇年一月二〇日、一一頁、付録一六頁)

所信を明かにす―国語教科書出版に際して― 岩波茂雄

岩波『国語』の特色 田辺元

岩波「国語読本」 穂積重遠

国語活動と国語愛 西尾実

学習指導研究書 編纂余録

「童言葉について（巻三の二〇「鴉勒講」参照）

編集室より

付録「国語」巻七の二一「月の兎」本文見本

同 学習指導研究書見本

本書の綱領と特色

第三号（昭和一〇年一月二五日、二二頁）

所信を明かにす―国語教科書出版に際して― 岩波茂

雄

左千夫と節 齊藤茂吉

蕪村の「葱買ひて」の句 岩田九郎

白石の「父の物語」 西尾実

人麿の歌一首 藤森朋夫

感想と批判 国語教育と心理主義 石田吉貞

同 希望 岸谷誠一

同 批評のこと 内野健児

学習指導研究書 編纂余録

寿号後日譚（巻一の二〇「愛馬」参照）

佐伯友文氏略伝（巻一の二〇「愛馬」参照）

河原市と榎木の宿（巻一の二三「藤樹先生」参照）

同名異虫みづすまし（巻一の五「春の使者」参照）

余白記 鴉の貪食（巻三の二〇「鴉勒講」参照）

編集室より

本書の綱領と特色

第四号（昭和一〇年二月二五日、三二頁）

「国語」への感想 石原純

もぞ・もこそ 佐伯梅友

註解論 西尾実

後日物語 金田一京助

巻一を教へて 峯岸義秋

感じた事ども 田辺爵

「国語」巻三 島崎乾太郎

「夜長」解釈私案 安東勘太郎

「国語学習指導の研究」 外山利雄

暮鳥の「日本」に就いて 編集部

「息もつかず」という諺 編集部

学習指導研究書編纂余録 国旗余話（二）

編集室より（昭和一〇年二月二五日）

「国語」の表紙

第五号（昭和一一年一月二八日、三〇頁、付録三頁）

国語の自在性 西田幾多郎

書くと読むと 茅野蕭々

解釈論 西尾実

註解余録 動詞「たかる」の活用その他

中等国語教育への警鐘―「国語」に対する管見 木俣修二

言霊教育の再認識 佐藤一三

「国語」巻七及び巻八を読む 伊藤慎吾

「国語」と平家物語 鈴木睿順

牧水の歌二首 形田藤太

特殊の経験 後藤亮

学習指導研究書編纂余録

「柿」は「かき」に非ず、「猿」は「さる」に非ず

ヤング案とドイツ(巻五の二三)「ツエツペリン伯号を

迎へて」参照)

ロックフェラー研究所・オロヤ熱(巻三の一二)「恩師

へ」参照)

「極めつけて」の特例その他

事実と作品

寒山拾得の場合(巻七の一一)「寒山拾得」参照)

編集室より

付録 「徒然草磐斎抄」抄録

寺田寅彦博士(訃報)

「国語」の綱領と特色

「国語」の表紙

第六号(昭和十一年二月二五日、二五頁、付録八頁)

歴史と伝説と実相 島崎藤村

解釈の生長 古田 弘

批評の立場 西尾実

「国語」への期待 山口正

「国語」の一特色 最所顕文

フィリップと共に 北沢喜代治

学習指導研究書編纂余録

野口博士の事ども

相阿弥と遠州(事実と作品2)

ルーズヴェルト初陣の軍旗(事実と作品3)

編集室より

付録 「解体新書」序文・凡例

付記 編集部

「国語」の表紙

第七号(昭和十一年五月一六日、二五頁)

福沢先生の著作について 小泉信三

小学読本瞥見 荻原井泉水

「邯鄲男」 野上豊一郎

はいかい・らうひの話 斉藤清衛

同じ様に髪を垂した娘

解釈の生長（承前） 古田 拙

広告 「文化」五月特集 日本文芸論 東北帝大文

化会編 岩波書店

潮の音 西尾実

広告 「教育」五月特集 綴方教育 岩波書店

「文学」五月号 岩波書店

「国語」御採用学校一覧

中学校の部 一三〇校

実業学校その他 九〇校

総計 二二〇校

付記

編集室より

広告 徒然草分類索引 岩波書店

「国語」の表紙

第一号から七号までの総目次を刊行順に見ていくと、ページ数が増えるだけでなく内容自体がしだいに充実していくのがわかる。筆者も多彩になり、読み物としての魅力もある。今読んでもなかなか魅力的な文章ばかりである。

第一、二号はまだ編集部からの伝達が主になっているが、三号からは、『国語』の感想や実践報告が加えられ、現場か

らの要望にも応えたり、編集上の経緯をも説明している。

例えば、第四号の「暮鳥の「日本」に就いて」という編集部の説明は、所載本文確定に疑義が生じていることについて、精細な調査の結果を踏まえて本文確定をして収録したことに触れている。また、第七号では、巻三の二課「潮の音」（島崎藤村）について授業をした旧友からの「大和言葉の魅力を教えよ」というのも分かるが今一つこれだという指導の観点がほしい」という趣旨の要望に対して、西尾自身が音響の言語的表現の学習の意義を説いている。

第七号の「「国語」御採用学校一覧」には、「国語」訂正再版刊行二年目の昭和一一年度採用校数を示している。採用校には、公立中学校だけでなく、私立中学校も多い。また、朝鮮、台湾、樺太、満州という侵略地での日本語教育の場となった官立、私立中学校が一五校含まれている。実業学校その他では、女学校のほかに宗教学校、青年学校、教塾、特殊技術者養成所、在米法人学校、盲啞学校でも採択されていた。

四 具体物としての「国語」教育の定式化と教養形成

これまで見てきたように、『国語』は「国語」教育実践家や研究者、学習者である子どもやその保護者に、さらには当時の文芸実践家や評論家にも、「国語」教育実践の具体的

諸相を読みやすい丁寧な編集で提示した。そのわかりやすさがアジア太平洋戦争後から今日までの教科書編集に影響を与えた。⁽⁴⁾他の「国語」読本の多くが模索的であるのに対して『国語』は計画的意図的に編集された。『国語』は西尾実の「国語」教育論の具体的産物として、「国語」科教育学建設のために提示されたものである。その『国語』が多くの教育現場に受け入れられ、自らの「国語」教育実践の確かさを実感した西尾は、「国語教育の構想」で、「国語」の定義を明確に打ち出していく。「国語」の概念は、二〇世紀初頭には、まだ漠然とした形でしか理解されてこなかった。『国語』の登場は、その概念形成を漠としたものから今日の「国語」理解へと定式化した重要な意義を持つ。今日の誰もが「国語」と聞いたときに脳裏に想起する概念を明瞭な形で示したのが『国語』であった。「国語」教育が形成する教養の姿を具体的に示したのである。

最後に、この点に関して二点確認しておきたい。西尾の認識的実践論である行的認識は、知識や態度の優位ではなく実践の優位を説いた。また、知識や態度も軽んぜず、実践と結びつくうえで重要であることを示したのである。これが西尾の教養論の核心である。

また、もう一点は、それぞれの教材をどういう文脈に置くかである。西尾は彼の言語活動論の具体化として『国語』

の編集にあたり、具体的な産物を示すことで当時の「国語」教育界にたしかに大きな影響を与えた。しかし、その一方で、彼の行的認識論にある弱点も露呈させたことは否めない。このときの西尾の実践的経験は、戦後間もなくの「国語」教育論へと繋がっていく。西尾がその弱点をどのように克服したかを検討することが筆者の今後の課題である。

(完)

注

- (1) 岩波書店編集部編『国語 学習指導の研究』岩波書店、一九三六年、七頁。
- (2) 松崎正治・浜本純逸「昭和戦前期における西尾実の学習指導観―岩波『国語』とその教授用参考書の分析を通して―」『神戸大学教育学部研究収録』第七八集、一九八七年、二五頁。
- (3) 諸井耕二「旧制中学校教科書 岩波編集部編『国語』全十巻をめぐって」『宇部工業高等学校研究報告』第三六号、一九九〇二年、一一五頁。
- (4) 『国語 特報』慶應義塾大学図書館蔵。
- (5) 吉田裕久「『中等国文』(1943)の編纂過程―「森下日記」の分析を通して―」(『広島大学大学院教育学研究紀要第二部』第五六号、二〇〇七年)は、一九四四(昭和一九)年度より使用された『中等国文』の編纂過程の中心に西尾実がいたことを、森下二郎記・西尾実編『神と愛と戦争―あるキリスト者の戦中日記―』(太平出版社、一九七

四年）及びその原典である「森下日記」、関係者の保存していた日記原本の調査により明らかにしている。吉田の解説によれば、森下二郎は長野県内の高等女学校、師範学校、中学校の教職を退いた後に、西尾実の紹介で上京して『中等国文』の編集のために文部省嘱託として中等学校教科書株式会社国語編集室に勤務した。吉田の紹介している「森下日記」には、『中等国語』の編纂の実際が細かく記されており、厳しい戦局に置かれた状況下で教科書編集がなされた実態がよく分かる貴重な資料である。

* 本研究は平成一九・二〇年度文部科学省科学研究費補助金基盤研究（C）（課題番号1953085「大正、昭和前期における国語教科書と教養形成に関する研究」）の研究助成を受けている。